

発達障害のある人の地域での自立を考える

発達障害のある人の ライフスタイルを元育つと支援

講師 山梨県立こころの発達総合支援センター所長 本田秀夫氏



臨床のなかで、小さい時から支援を受けている人たちと、大きくなつてから支援につながった人たちとは何か違うと考えるようになります。

「目に見えない異常」です。一見すると他の人と同じようにふるまつていいのに、他の人が考えないようなことを内面で考へている。目に見えないから分かりにくく気にならない。

ここからは社会のなかで一番問題が深刻になりやすい、自閉症スペクトラムを中心にお話をしたいと思います。

自閉症スペクトラムの特徴は、臨機応変な対人関係が苦手で、微妙なコミュニケーションのずれを残し続けます。そしてこだわりとして、本能的に自分の関心ややり方、ペースの維持を最優先させたいということがあります。

こだわりをどう認識してどう取り扱うかは、実は支援者の一つの関門です。知つておくべきことの一つは【認知が発達するところだわりも発達

この理念を持てるかどうかで、彼

らの社会参加への意欲が全然違つてきます。思春期までにある一定の意欲のエネルギーを蓄えた人は、その後多少波乱万丈な人生であっても、前向きに、力強く進んでいける印象があります。

そうすると、思春期よりも前の育児では、保護的な環境を提供し、得意なことを十分に保障する、苦手意識を持たせない、大人に相談していくまくいったという経験を持たせると、いったことが重要になってしまいます。めったに失敗しない得意なことを中心の生活をする。余計な特訓をしない。物心つく前の特訓は一次障害の危険を高めます。

一番よくないのは、苦手の克服を最優先課題にすることです。他の人に合わせることも実は、苦手の特訓になります。絶対的なルールをちゃんと教え、それを守るという習慣を身につけた方が、よほど社会性が育ちます。

社会で必要な力をつける



自閉症スペクトラムの人は、人の言つことを聞くというカルチャーはなく、彼らにとつて理にならなければやる気になる。だから、彼らと合意が結べるかどうかが大事になります。

こちらが命令するのもいけないし、一方的な要求をこちらが追認するのでは間違えた受容という名の責任になる。一番のポイントは、呈示は大人からすることです。子どもがよしやろうという気持ちにならなければ、その合意はなりたたない。命このタイミングでこういう提案をしたら子どもがやる気になるだろうと見抜いて、それを提案することを習

定感を持つことです。ソーシャルスキルとは、協調性ではなくルールを守るということ、そして他の人に相談できる力です。自分の力の限界を超えたことを人に相談をする習慣が、小さい時から身についていると、いろんなことに対応できます。つい「そのくらい自分でやりなさい」と突き放すとなかなか大人に相談しなくなる。人に相談をしながら自分のできることをしっかりとやることが大切です。

また、年齢が小さいうちから現実社会を生きていく感覚を養つておきたい。何かを計画して実行し、試行錯誤してみて、上手いかなかつたら反省して、修正してやり直してみ

て、達成する。こういったことをいろんなところで経験するのが大事ですね。

そして、子どもに教えるべきポイントはなにかを考えておく必要があります。例えば、大人になったとき、「適切な食事」「身辺の清潔保持」「金銭感覚と買い物」「通院と服薬」「他人との意思疎通および対人関係」「自分のまわりの安全とか、危機の対応」「社会性、例えば銀行での金銭の出し入れや公共施設の利用が一人で可能か」といったことを一人暮らしでできるようになるかということです。

慣として持つ必要があるわけです。子どものニーズを大人が汲み、それをわかりやすく呈示して、子どもがそれに対し合意する。これを小さい時から丁寧にやることにより、結果として大人との信頼関係を身につける。そうして少しずつ社会ルールやマナーを教えていき、大人になつたとき自分で自分を構造化出来るようになることが一定の目標だと思します。

卷之三

慣として持つ必要があるわけです。子どものニーズを大人が汲み、それをわかりやすく呈示して、子どもがそれに対し合意する。これを小さい時から丁寧にやることにより、結果として大人との信頼関係を身につける。そうして少しずつ社会ルールやマナーを教えていき、大人になつたとき自分で自分を構造化出来るようになることが一定の目標だと思します。

自閉症スペクトラムの人は、人の言つことを聞くというカルチャーはなく、彼らにとつて理にならなければやる気になる。だから、彼らと合意が結べるかどうかが大事になります。

こちらが命令するのもいけないし、一方的な要求をこちらが追認するのでは間違えた受容という名の責任になる。一番のポイントは、呈示は大人からすることです。子どもがよしやうとうという気持ちにならなければ、その合意はなりたたない。命このタイミングでこういう提案をしたら子どもがやる気になるだろうと見抜いて、それを提案することを習

人が多いんですね。自分が良いと思っているものを「ああ、良いね」とか「なるほど」というふうに自分の話に耳を傾けてくれる人にものすごく信頼を置きます。

大人の発達障害の人達の支援では、自分をよく知る、自分の問題を知り、誰かに相談をするという構を作ります。ここにものすごく時間を掛けてください。そして支援者も、うまくことが運ばないと思ったら、やっぱり自分の問題が何かを整理してくれる相手を探していただければと思います。(→)

トータルな量は一定だと考えています。規則正しい生活習慣とかいい趣味とか、生活にプラスになることわりに興味が向くように接することで、むしろ一般の人よりきちんとした社会人になったりする場合もあります。

特徴が残っていても「次的な問題」は少なければ、特有の社会参加への道はあるかもしれない。そうすると、次的な問題を予防する方が重要だと思ふんです。

本田秀夫氏 プロフィール

東京大学医学部卒業。医学博士。横浜市総合リハビリテーションセンター勤務等を経て、2011年4月より現職。著書『自閉症スペクトラム 10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体』『アスペルガー症候群のある子どものための新キャリア教育』・小・中学生のいま、家庭と学校でできること』など。